三世代にわたる生活文化の伝承と将来への展望（Ⅲ）
—男子学生と女子学生の比較—

布施谷節子，小菅充子，中島明子，名取史織，三善勝代

Transmission and Prospect of Culture in Life Style in Three Generation Families
—Comparison between male students and female students—

Setsuko Fuseya, Mitsuko Kosuge, Akiko Nakajima
Shiori Natori, Katsuyo Miyoshi

生活文化の伝承の実態について、ジェンダーの視点から検討を行った。研究資料は、2001年に行った千葉県内の男子学生355名のアンケート調査資料と、比較資料として前年の本学女子学生307名のアンケート調査資料である。主な結果は以下の通りである。

1）「食」領域では、男子学生は健康よりも嗜好性を重視する傾向にあり、男子学生に対して「食」の広い知識を伝達する必要がある。

2）「衣」領域では、男子学生は、知識不足と家族への依存性から、衣生活の自立が女子学生よりも遅れている。

3）「住」領域では、雛飾りと鯉のぼりの飾りを除き、性差よりも住宅形式の差が反映されていると考える。

4）「暮らしの中の植物」領域では、女子学生の方が健康に対して敏感に植物を利用していたり、花を飾ることに性差がみられた。庭木は、男女ともにマツ、カキが多かった。

5）「生活経営」領域では、男子学生の方に、家族同居へのこだわりがみられ、就業をめぐる女性の生き方についても保守的な傾向がみられた。

キーワード：ジェンダー、年中行事、生活習慣、環境対策、暮らしの中の植物

緒　言

本研究は、「生活文化の伝承と将来への展望」一連の研究の一環として行ったものである。前報では、衣食住と生活経営ならびに暮らしの中の植物の5領域における生活文化の伝承の実態について、祖母・母親・娘（学生）世代の世代間の差を明らかにした[1),2)]。その成果を、

2001年７月の台北におけるアジア地区国際家政学会において発表した[3]。その際に、アジアでは家政学の各領域でジェンダーの視点からの研究報告が多いことに改めて驚かされた。

男女共同参画社会をめざす今日、生活を築く責任は男女ともに負っている。果たして現状はどうであろうか。生活に対する意識に男女差はないのだろうか、男女がともに高等学校で家庭科を学ぶようになってから10年近く経過したが、その成果は現実の生活の営みの中に表れているのであろうかなどの疑問が生じてきた。

日本人が築いてきた生活文化の伝承の担い手となるだろう現代の若者の、彼ら自身の生活に対する意識を、男女の違いを切り口として分析し、明らかにしておくことは、わが国の生活文化の伝承と将来の生活文化を考える上で、重要なことと考えるに至った。

そこで、本報では、前報[1),2)]に引き続き、男子学生を対象とした生活文化の伝承に関するアンケート調査と、先に行った女子学生に対する調査結果とを比較し、男女の性による相違を明らかにすることを目的とした。

資料ならびに研究方法

研究資料は、2000年１月実施の本学女子学生307名のアンケート調査資料と、千葉県内４大学の男子学生355名のアンケート調査資料である。男子学生に対するアンケート調査は、2000年12月～2001年１月に３校、2001年６月に１校に対して実施した。調査方法は、各大学に依頼した教官の担当授業内で、集団で実施し回収したものである。４大学の内訳は、私立の建築工学科94名、私立の不動産学科139名、私立の工業デザイン学科64名、国立の教育学部58名である。学年は１年生から大学院生にわたるが、１、２年生で全体の約80%を占めている。質問項目は女子に対する調査項目とほぼ同じであるが、一部削除したり、独自の項目を追加したものもある。「食」の分野で24項目、「衣」で15項目、「住まいと住み方」で16項目、「暮らしの中の植物」で10項目、「生活経営」で11項目、属性（フェイスシート）で７項目の合計83項目である。

女子学生の属性はすでに報告済み[1)]であるが、男子と併せて表１に一括して示す。これによると、本学女子学生の出身県（実家の居住地）は約半数が千葉県内であるのに対して、男子学生のそれは約４分の１にとどまり、出身県が本学の女子学生よりも広範囲に渡っている。従って、通学方法も、男子学生は自宅外通学生が多く、有意差が認められた。その他、家族の人数、職業、住居形態には有意な差はみられなかった。

表１　調査対象者の属性（男女の比較）

	実家の居住県**			実家の居住地		実家の住居形態	
	千葉県	関東甲信越	その他	市街地・郊外	農山漁村	戸建て	共同住宅
男子学生	96人 (25.9%)	162人 (52.8%)	70人 (21.3%)	298 (88.7)	36 (10.7)	259 (76.8)	74 (22.0)
女子学生	150 (49.0)	133 (43.5)	23 (7.5)	260 (84.9)	46 (15.1)	247 (80.7)	58 (19.0)

	通学方法**		家庭の職業		家族構成人数	
	自宅通学	自宅外通学	給与所得者	自営業	平均	標準偏差
男子学生	177 (52.2)	161 (47.5)	234 (69.4)	95 (28.2)	4.7	1.1
女子学生	228 (74.8)	77 (25.2)	223 (75.3)	66 (22.3)	4.7	1.2

**カイ二乗検定　１%水準で有意

結果および考察

１「食」について

「食」の分野で、男子学生に対してなされた調査は、24項目であったが、そのうち女子学生と同じものは、表２に示す20項目で、④を除く19項目の男女の結果につき、カイ二乗検定を行ったところ、表中△印を付した以外の14項目において、差の有意性が認められた。

① 日常の食事状況では、味噌汁をほとんど飲まない男子学生は36%（女子25%、図１―１）であり、これは今回の他の調査項目、朝食の欠食率が34%（女子学生に対しては調査されていないが、平成９年度国民栄養調査[4]の20歳代の結果、男33%、女24%にほぼ等しい）

表２　食生活関連の調査項目概要（男子学生用）

①日常の食事状況	△朝食の形態、摂取状況（味噌汁、△牛乳、魚と肉、麺類、紅茶） ダイエットの有無、配膳
②家庭における調理	調理状況（おにぎり、寿司、おせち料理、魚のおろし）
③行事食 食品衛生など	摂取状況（△雑煮、△丑の日の鰻、年越しそば、赤飯） 賞味期限の確認、△非常食の用意、生ごみの量
④おふくろの味	自由記入

△はカイ二乗検定にて男女間に有意差なし

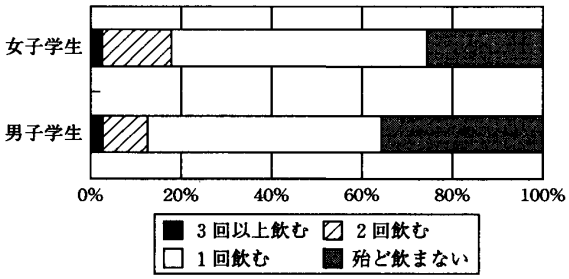

図1—1　味噌汁の摂取状況

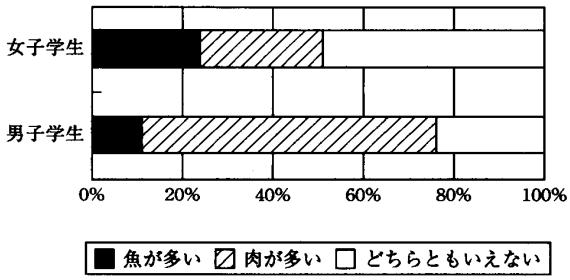

図1—2　魚と肉の摂取状況

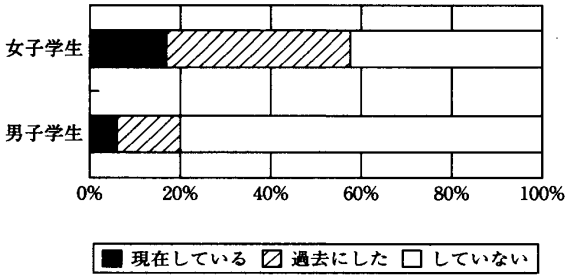

図1—3　ダイエット経験

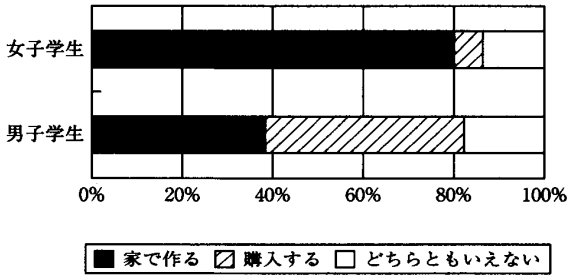

図1—4　おにぎりについて

であったことが、強く影響していると思われる。魚と肉とでは、肉を食べることが多いと答えたものが、男子66%で、女子27%を大きく上まわり（図1—2）、これは、麺類のうち中華麺を食べることが多いと答えたもの、男子61%に対し女子27%と、似た数値であった。男子学生は、脂肪の多い、また塩味のはっきりした食べ物を好む傾向があると推察される。肉類からの飽和脂肪酸の多量摂取や、汁物の中華麺の一食中の食塩量（4～7g)[5]を考えあわせると、生活習慣病の発症が危惧される。ダイエットをしたことがあるもの（図1—3）、紅茶を飲む際、砂糖を入れるもの（男子64%、女子41%）の結果からも、男子学生の食習慣には、嗜好性が強く表れており、日常、食事摂取に関して配慮がなされていないことが窺い知れる。正しく配膳ができるものも、有意に少ない（男子57%、女子83%)。

② 家庭における調理では、おにぎり（図1—4)、寿司、おせち料理のいずれについても、女子よりも少ないという結果が得られたが、これは、学生本人の調理以外の回答も含まれたものであろう。魚のおろしができるものは、女子72%に対し男子は25%に過ぎない。

③ 行事食などについては、年越しそばや祝いの日の赤飯（図1—5）の摂取状況では、男子が少なく、食文化の伝承は男性から途絶えることを示唆しているように思われた。食品の購入時に賞味期限を確認するのも男子学生では少なく（図1—6)、食品衛生に対する関心も低いと推察される。生ごみの出し方は、少ない方とこたえたものが女子よりも多

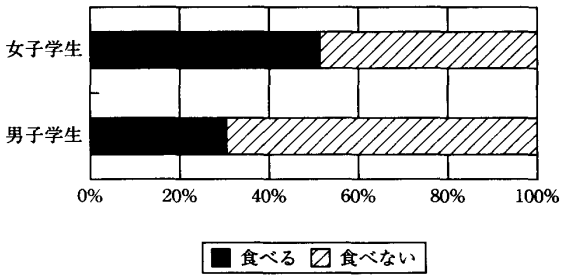

図１―５　祝いの日の赤飯

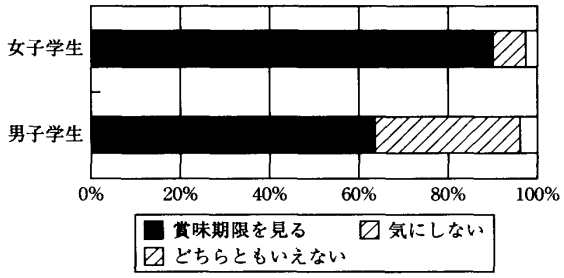

図１―６　購入時の注意

表３　おふくろの味

男子学生（297人）		女子学生（291人）	
味噌汁	31人	煮物	31人
肉じゃが	16	肉じゃが	21
カレーライス	8	味噌汁	8
煮物	7	カレーライス	4
卵焼き	4		

かった（49%と24%）が、これは実際に調理をしていないことによる結果であろう。

④　あなたにとって「おふくろの味」とは何ですかとの問いに対する、有回答における割合（１番に記されたもののみ）は、表３の通りである。４位までに含まれる料理名は、男女同じもので、この４種類でいずれも全体の2/3を占めている。しかし、男子学生においては、女性三世代の調査[1]で、どの世代においても１位であった煮物は、わずか７%の４位であり、「おふくろの味」にも、先に述べた、肉や中華麺を好むという嗜好性の問題が関係しているように思われた。ほとんど飲まぬという者が女子より多かった味噌汁が、31%で１位であったことは興味深い。

以上、「食」に関する調査では、多くの項目で男子学生と女子学生の間で有意の差が認められた。これらの結果より、男子学生は、健康の第一の基本であるという観点よりも、嗜好性に重点を置く食生活を過ごしていることが窺い知れ、食に関する広い範囲の知識の伝達の必要性を強く感じた。

なお、自宅通学生と自宅外通学生とでは、食生活における自立の程度に差がみられるが、この点についての詳細な検討は、紙面の関係もあり、次報に譲ることとする。

２　「衣」について

男子学生を対象とした「衣」に関する質問項目は表４に示すようである。女子学生に対して行った和服に関する仕立て、着付け、処分方法については、男子学生に対しては設問とし

なかった。男女に共通する質問項目について、男女の違いを検討するために、カイ二乗検定を行った。その結果、該当する12項目中、洋服の処分方法をのぞく他の全てにおいて、1％水準以上で有意となり、男女の差が明らかとなった。

ボタン付け、ほころび直し（図2―1）、既製服の直しなど衣服の補修に関しては、自分ではせずに、身内の人に頼む割合が男子学生は女子学生の2、3倍も多く、しかも、男子学生には、ボタンがとれたまま（11.7%）、ほころびたまま（24.9%）着用している人があり、女子学生にはほとんど見られない現象である。

日常着の着方に関する項目では、寝間着として着用する服種で、寝衣としてのパジャマを着用するのは、女子学生では45.6%であるのに対して、男子学生は20.7%にとどまり、その代わり、ジャージやTシャツが多い。寝衣と部屋着の区別が明瞭でなくなってきているということであろう。春秋の肌着の着用についても（図2―2）、男子学生はいつも着ないという割合が33.1%あり、滅多に着ないを合計すると約半数になる。それに対して、女子学生の場合は、その割合は男子学生の約半分で、全体の約4分の1にとどまる。男子学生は年間を通して肌着を着用しない人が多いと思われる[6]。これは、いわゆる肌着の代わりにTシャツが常用されるためであろう。

衣服の管理に関する項目では、衣替えは（図2―3）、年に2回と決めてする（男子27.5%、女子46.2%）よりも、特に決めていないとする割合が多く、男女ともに約半数である。男子

表4　衣生活関連の調査項目概要（男子学生用）

1．ミシンの使用状況	△	6．葬式の着用衣服	◎	11．古い布団の処分法	○
2．ボタン付け	◎	7．寝間着の種類	○	12．既製服の直し	○
3．ほころび直し	◎	8．肌着の着用	◎	13．レンタルの利用	◎
4．浴衣の着用経験	△	9．衣替え	◎	14．着ない洋服の処分法	○
5．七五三着用衣服	○	10．虫干し	◎	15．衣服の購入法	△

◎は男女共通、○は選択肢の一部が異なる、△は男子のみ

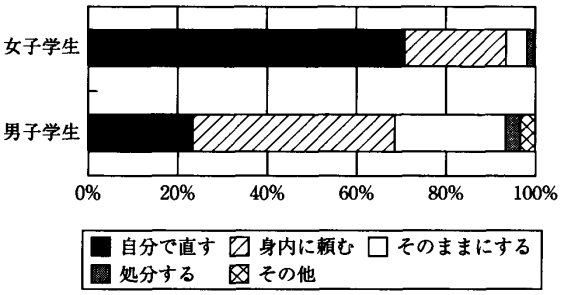

図2―1　ほころび直し

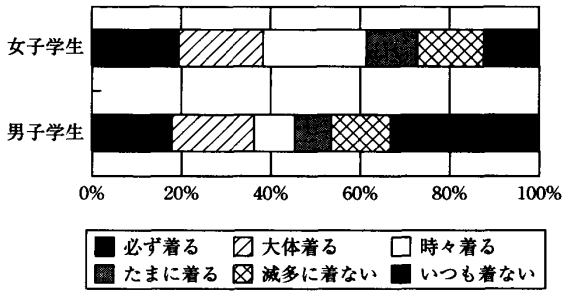

図2―2　肌着の着用

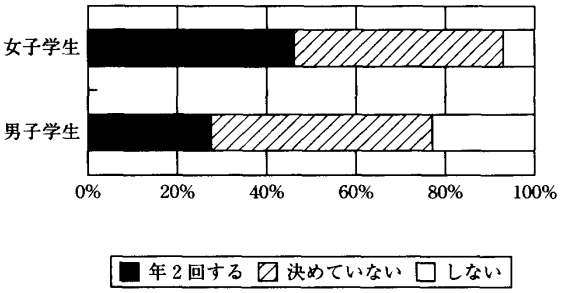

図2—3　衣替え

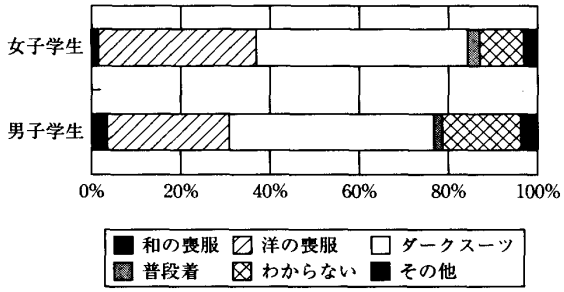

図2—4　葬式の着用衣服

学生は「しない」が22.3%で女子学生の約4倍もある。エアコンによる室内環境の整備で、着衣に季節差が薄れてきたせいでもあろうが、男子用の衣服は女子用よりも服種が少なかったり、衣服の所持枚数が少ないことにもよるだろう。虫干しについては、虫干しという言葉の意味がわからないとする男子学生が多い（34.8%）。女子学生は自分ではしない（53.1%）人は多いものの、意味が分からない人は少ない（13.7%）。乾燥剤や防虫剤の進歩で、虫干しの必要性が低下したとはいっても、生活文化の理解という点では、虫干しの意味は理解していて欲しいものである。古くなった布団の処分については、男子学生は打ち直し（7.6%）よりも丸洗い（11.8%）を考える人が多く、女子学生（13.8%、6.6%）とは逆の結果である。ゴミとして考える割合では男女差は少ない（約4分の1）ものの、女子はそのまま保管する（18.4%）のに対して、男子はどうしていいかわからないという割合（38.0%）が高い。使わない洋服の処分方法については、男女差は有意とはならなかった。男女ともに最も高い割合を示したものは、知り合いや身内の人に譲るというものである。

フォーマルウエアに関する項目では、大学生はフォーマルウェアを着用した経験が乏しかったり、所持していない場合が多いということもあり[7]、男子学生は葬式に着用する衣服（図2—4）がわからない人があり（18.3%）、また、その割合が女子学生（9.8%）より高い。七五三に着用[8]したものを男子学生は覚えていない（23.4%）など、女子学生に比較して、知識の乏しさや関心の薄いことが目立つ。

一方で、浴衣について、最近着用したことがあったり（38.9%）、着用したことはないが着用してみたいという（16.6%）人が多いことから、近年の浴衣ブームに乗って、男子も関心が高まってきたものと思われる。これが、衣生活の伝統文化の理解と関心を深める手がかりの一つになって欲しいものである。

なお、自宅通学生と自宅外通学生とでは、衣生活における自立の程度に差がみられるが、この点についての詳細な検討は、食生活領域と同様に、次報に譲ることとする。

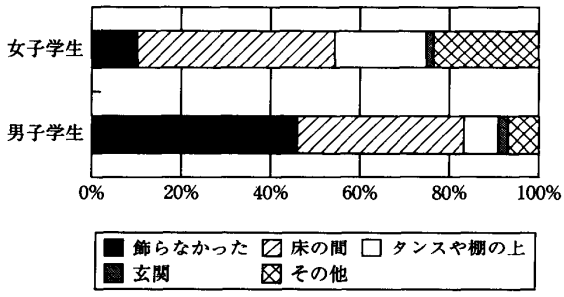

図３―１　雛祭りの雛の飾り

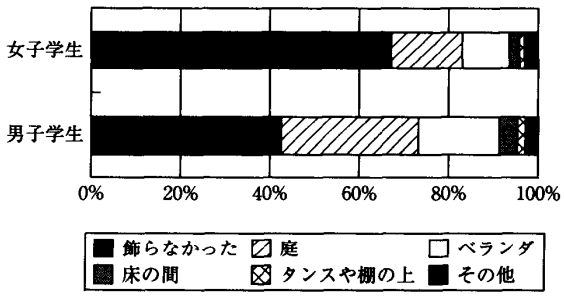

図３―２　こどもの日の鯉のぼり飾り

3 「住まいと住み方」について

家庭内でのジェンダー規範が、住居空間のあり方や住み方に反映していた戦前までとは異なり、近年の日本の住様式―住み方やしつらい方において、基本的には性による相違はなくなっていると予想され、もし相違がみられるのであれば、非常に興味がある。

調査結果からは、予想通り、住生活領域に関しては、全体として大きな差異はみられなかった。しかし、いくつかの点で述べておくべき内容がみられた。

① 顕著な違いがみられたのは、行事飾りである。当然のことながら、３月３日の雛祭りの飾りと、５月５日の鯉のぼりのしつらい状況の差は大きい。

雛人形飾りについては（図３―１）、男子の46%、女子の10%が「飾らなかった」とし、鯉のぼりについては（図３―２）、女子の67%、男子の42%が「飾らなかった」としている。ここでは他の兄弟姉妹の有無との関係を分析していないので、性差によるしつらいの相違がどの程度かは正確には明らかではない。室内に飾る雛人形についておいては差異が大きく、戸外空間で飾る鯉のぼりの場合はその差は小さく、居住環境も影響していることが読み取れる。

その他の行事のうち、鏡餅、月見飾り、クリスマスについてはほとんど違いはない。しかし、正月の門松飾りに関しては、かなりの違いがある（「飾らなかった」男子51%、女子71%）が、性差による要因は考えられず、居住地域の相違もみられず、その理由はわからない。

② 生活環境に考慮した暮らし方に関する項目では、「生ごみの処理」、「紙ごみの処理」、「暑さ対策」、「水の利用」で若干の相違がみられた。

この中で、ジェンダーにかかわると考えられるものは「水の利用」で、「風呂の残り湯の使用」が男子より女子が多く（男子42%、女子52%）、洗濯の際に実際に使用した経験の差が反映したと考えられる。その他の差は、生ごみを「自宅の庭に埋めた」、紙ごみを「自宅で燃やした」などは一戸建て住宅のやや多い女子の方が多く、これも住宅形式によ

る差異と考えられる。家庭における差異、教育による差異の影響はわからない。

③ かつての就寝様式においては、ジェンダーによる相違がみられたが[9]、今日どのようになっているかに注目した。しかし、住宅形式の違いがあるにもかかわらず、ほとんどなく、かなり平準化してきているのがわかる。

なお、居住様式に関するジェンダーをみるならば、日常生活における清掃、室内の整理整頓・装飾などに現れる可能性があるが、それらについては調査の不備から聞いていない。

4 暮らしの中の植物

今回の男子学生に対する質問項目は、先の女子学生に対する質問項目[2]よりも少なく10項目である。項目の概要は、①健康長寿祈念と豊作祈念の農耕儀礼が混合した年中行事にかかわる植物[10)、11)、12)]について５項目、すなわち、七草粥の七草の入手法、子供の日に菖蒲湯に入ったか、七夕をしたかと笹の入手法、月見にススキを供えたかとその入手法、冬至に柚湯に入ったかと、②薬草について１項目、③自然環境につながる庭に注目した質問として４項目、すなわち、季節の花を飾ったかとその入手法、庭の状態、家の周囲は生け垣かどうか、庭にあった大きな木３種、の合計10項目である。

これらの質問項目はいずれも、回答者の子ども時代についての質問で、その回答は、本人あるいは主に母と息子の関係の反映である。庭木の結果を除いては、男女２グループに分けて、各項目についてカイ二乗検定を行った。

菖蒲湯に使う菖蒲は、強い香りのアサロンという成分をもち、その香気は降魔の力をもつ[10)、12)、13)]といわれるが、菖蒲湯に入ったのは、女子で48%、男子で44%で有意な差はない。冬至の柚湯では、女子で77%、男子で63%で、0.1%水準で女子学生の方が多く入っている。これは近年の健康ブームも影響していると思うが、女性の方が健康について敏感である傾向は、薬草の使用にも表れている（図４―１）。アロエを使ったことがある女子学生は71%で、男子学生の49%を大きく上回っている。たぶん、アロエが食品や化粧品としても多く使われており、女子には男子よりなじみが深いと思われる。前回の調査によれば、女子学生世代は、母親や祖母世代より、ずっと多くアロエを使用していたようである[2]。

しかし、古くからのドクダミやゲンノショウコを使用したことがある頻度は全体に低い割合であった[2]。ところが、今回の男子学生は女子学生と比べて、有意に高い比率を示している。これは、10歳時の居住地が、市街地や郊外以外であった学生が、女子学生よりも男子学生の方が４%ほど多く、自然環境に恵まれていたためかと思われる。そのことは、七草粥の行事にも表れている（図４―２）。これは、正月七日に若草の息吹、生命力を身体に与えようとする呪術的要素の強い行事[10)]であるが、七草を摘んで粥を作ったものは、男子の方が女

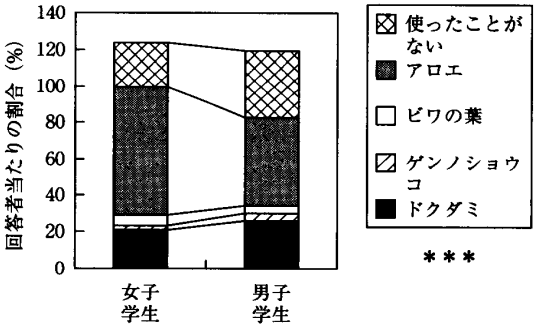

図4—1　薬　草

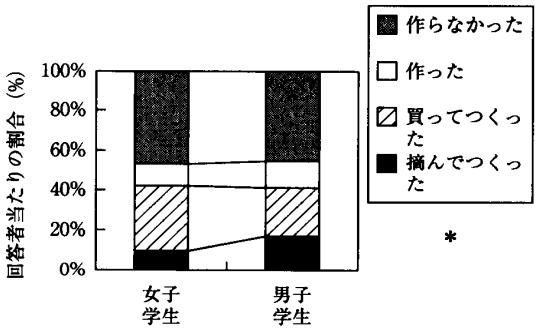

図4—2　七草粥

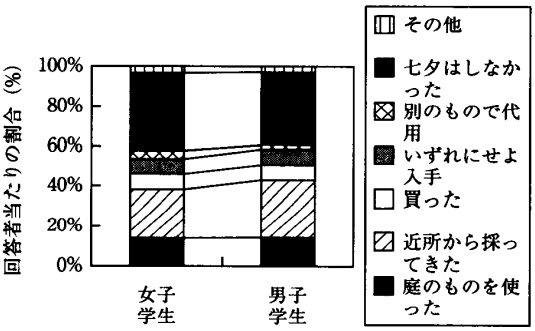

図4—3　七夕の笹

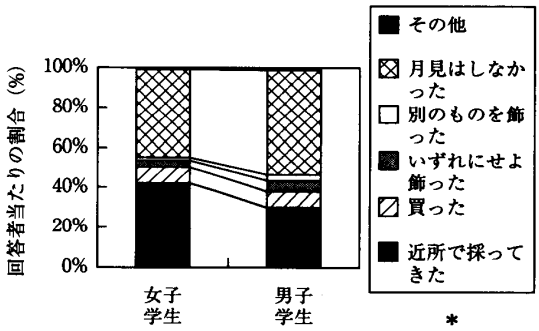

図4—4　月見のススキ

（＊カイ二乗検定5％、＊＊1％、＊＊＊0.1％水準で男女間有意）

子よりも有意に多い。

また、七夕の笹を近所から採ってきたものに、同様の傾向がみられた(有意差はなかった)(図4—3)。笹や竹はその旺盛な生命力と抗菌力があるために、古来から神聖なものとされている[10),12),13)]。しかし、農耕儀礼の意義の強い月見でのススキについては、それを近所から採ってきて供えたのは、女子学生の方が有意に多い（図4—4)。その理由は不明であるが、ススキをお供えするというよりは、たぶん、花を飾る感覚であったであろう。それは、季節の花を飾るかどうかの質問で、飾る割合は、男子は(50%)大きく女子を(82%)下回っていることからうかがえる。

庭にあった大きな庭木は、多い順に5位までをあげてみると、女子では、マツ、カキ、ウメ、キンモクセイ、サクラが、30、25、18、16、12%で、男子では、マツ、カキ、ウメ、サクラ、ビワで、それぞれ33、25、12、8％であった。両者ともに圧倒的に多いのは、昔から神のよりしろとされた[10)]マツで、回答者3人に1人の家の庭にある。それだけ日本におけるマツは、重要な存在であったと思われる。また、カキは、4人に1人の家の庭に植えられていた。食糧難の時代には貴重な食料となったことであろう。女子学生の母親世代では55%、

表5　家族での週あたり夕食回数（%）

夕食回数	男	女
全くない	27.1	19.9
1，2回	29.1	37.4
3，4回	20.2	17.3
ほとんど毎日	21.9	18.6
その他	1.7	6.8
全　体	100.0	100.0

表6　家族同居規範についての考え方（%）

家族同居意識	男	女
家族はいつも一緒に暮らすべき	26.1	19.3
仕事の都合なら仕方がない	36.4	35.1
勤務先から援助があるなら別居してもかまわない	7.6	4.6
心がけとやり方次第で乗り切れることだ	26.1	37.1
その他	3.8	3.9
全　体	100.0	100.0

祖母世代では42%もあった。

近代日本では、西欧文化一辺倒となった時期が長く、古くからの伝統行事を迷信であると、遠ざける風潮があったが、混迷する現代、日本の生活にねざす原始宗教的伝統行事は、人々の心に安らぎを与えてくれているのではないだろうか。

5 「生活経営」について

ここでは、家族関係を含む生活経営にかかわる事項別に、性差の有無を検討してみる。

① 家族揃って夕餉の食卓を囲む機会（表5）は、男女とも「週に1、2回」が最多で、次に「全くない」、「週に3、4回」の順であり、順位について性差は見られない。しかし、数値については、女子で最多の「週に1、2回」が4割近くを占めているのに対し、男子のそれは3割弱に留まり、回答にバラツキがある。

基本属性を見ると、男子学生では、全体の45%が自宅外通学である（女子は25%）。本事項に認められた性差の一因は、この点に求められるかもしれない。

② 学業や仕事の都合で離れて暮らす家族が珍しくなくなった昨今、同居は必ずしも家族の要件ではなくなりつつあるとされる[14]が、男女学生の場合はどうか（表6）。女子で最多は「心がけとやり方次第で乗り切れる」（37.1%）であり、前向きな対処姿勢が窺えるの

表7　就業をめぐる女性の生き方についての意識（%）

女性の生き方	男	女
結婚するしないにかかわらず、働きにでないで家にいるべき	9.4	2.3
一度就職して結婚や出産を機に家庭に入るのがよい	19.4	12.1
家事や育児が忙しい時期には休職し、子どもが大きくなってから再び働くのがよい	33.1	48.8
結婚や出産にかかわらず、仕事を持ち続けた方がよい	16.4	25.4
必要に応じて、臨時にパートやアルバイトをするのがよい	10.0	9.4
その他	11.7	2.0
全体	100.0	100.0

表8　結婚についての考え方（2答選択による延べ該当率%）

結婚観	男	女
親孝行や世間体もあるので結婚はした方がよい	7.9	5.2
ごく自然なこととして、結婚はするものだと思う	47.3	50.0
適齢期を過ぎても結婚できなければ、出会いの機会を積極的に求めた方がよい	7.0	4.6
結婚は経済的に安定するので望ましい	5.9	9.2
結婚は精神的に支え合うことができるので望ましい	54.1	61.1
戸籍は別のまま夫婦生活を送る「事実婚」が望ましい	2.5	0.7
必ずしも結婚はしなくてもよい	38.0	44.1
家族の束縛を受けたくないので、結婚はしたくない	2.5	2.3
その他	2.3	2.6
全体	167.5	179.8

に対し、男子では「仕事の都合なら仕方がない」が最多（36.4%）であり、しかも2位の一方には「家族はいつも一緒に暮らすべきだ」（26.1%）が挙げられている。男子には、家族同居規範への固執が垣間見える。

今から10年ほど前に実施された㈶労働問題リサーチセンター委託の「転勤と勤労者生活に関する調査」[15]でも、この規範に対する態度には、転勤者である夫と彼に同行した妻の間で微妙なズレが認められている。すなわち、96.5%もの夫が「家族は一緒に暮らしてこそ家族」と答えていたのに対し、妻の方はこれを6.8ポイント下回った（N＝458）。家族同居への思い入れは、どうやら、男性のほうが強そうである。

③　就業との関連で女性の望ましい生き方を問うた結果（表7）では、男女とも「家事や育児が忙しい時期には休・退職し、子どもが大きくなってから再び働くのがよい」とする「育

児後再就業型」が最多であったが、第2位には、女子で「結婚や出産にかかわらず、仕事を持ち続けたほうがよい」とする「就業継続型」ないし「家庭・仕事両立型」が挙げられた（25.4%）のに対し、男子では「一度就職をして結婚や出産を機に家庭にはいるのがよい」とする「結婚・出産退職型」であった（19.4%）。

この結果からは男子の保守性が読み取れるが、男女共同参画社会に関する世論調査[16]（平成9年9月実施）でも、女性の望ましい生き方を「家庭・仕事両立型」とした20歳代は、女性が54.1%で男子は48.5%であったと報じられており、本調査でそれを追認する形となった。

④ 両性の結婚観（表8）の違いを探ってみると、最多の「精神的に支えあえるので結婚は望ましい」から3位の「必ずしも結婚はしなくてもよい」まで、順位について性差は認められなかった。しかし、各順位の数値はいずれも女子が男子を数ポイント上まわっており、女子のほうが、明確な意思表示をしているように受け取れる。

ともあれ、男女とも過半数が結婚を両性の精神的な支え合いと捉えている事実からは、戦後生まれの民主的な結婚の理念が、半世紀を経た今日では、若年男女層に違和感なく受容されているのだということがわかる。

まとめ

筆者らは、前報[1),2)]では、生活文化の伝承と将来への展望について、本学の女子学生、母親、祖母の三世代にわたって、世代間の意識の相違や伝承の実態を明らかにした。本報では、前報を踏まえた上で、ジェンダーの視点から千葉県内の男子学生に対して同様な調査を行い、両性の相違を検討した。主な結果は以下の通りである。

① 食生活関連では、多くの項目で有意な性差が認められた。男子学生は、健康の観点よりは、嗜好性を重視する食生活を送っている傾向がみられ、男子学生に対して、食に関する広い知識を伝達する必要性が明らかになった。

② 衣生活関連では、衣服の補修や衣服の管理や着装の規範などにおいて、女子学生よりも自立が遅れているといわざるをえない。即ち、技量の未熟さから家族に依存したり、補修や管理をしないままに過ごす学生が多くみられた。また、知識のなさからどうしたらよいかわからず手をこまねいている例が多くみられた。

③ 住生活関連では、性差が見られた項目は少なかったが、年中行事における雛飾りと鯉のぼりの飾りには、当然性差がみられ、鯉のぼりは男子学生の過半数（女子3割弱）が、雛人形は女子学生の9割近く（男子半数強）が飾っていたと答えている。また、「水の利用」

表9　「食」・「衣」関連の男女差がみられた項目一覧

日常の状況	食事	味噌汁・魚と肉・麺類・紅茶の摂取状況、ダイエットの有無、配膳
	着方	寝間着の種類、肌着の着用
生活技術	調理	おにぎり、寿司、魚のおろし、おせち料理
	補修	ボタン付け、ほころび直し、既製服の直し
社会儀礼	行事	年越しそば、赤飯
	儀礼	七五三の着用衣服、葬式の着用衣服
管　理	食	賞味期限の確認、生ごみの量
	衣	衣替え、虫干し、古い布団の処分、レンタルの利用

で「風呂の残り湯の使用」は女子学生が多く、経験の差が反映されていると考えられる。

④　暮らしの中の植物関連では、冬至の柚湯、アロエの利用などから、女子学生の方が健康に敏感である傾向が読みとれる。また、花を飾るという点でも明らかな性差がみられた。庭木では、男女ともにマツとカキが圧倒的に多く植えられていた。

⑤　生活経営関連では、男子の方に家族同居へのこだわりが垣間見えた。就業をめぐる女性の生き方については、男女とも最多の「育児後再就業型」に次ぐ第2位に、女子で「就業継続型」が挙げられたのに対し、男子では「結婚・出産退社型」とされ、男子の保守性が読みとれた。

「食」「衣」「生活経営」に関する調査項目は、男女とも学生個人の知識や技量、経験や意識の違いが反映されやすいものであり、性による相違が明らかになったと考える。しかし、「住」「暮らしの中の植物」では、学生の子ども時代のことを質問していることもあり、学生の居住地域の特性や住宅形態の違いが大きな要因となり、明瞭な性差は表れにくいという結果であった。

いずれにしても、これからの男女共同参画社会の中で、生活のあらゆる場面で少しでもジェンダー・バイアスを減らすためには、幼い頃からの成育過程にかかわって、社会全体の意識改革を進める必要があり、長い時間を要する問題である。とりわけ、家庭からの実践が重要となろう。日常生活の生活技術の伝承は、生活文化、社会の文化の質にかかわる問題である。そのような観点から、本研究結果をみると、特に「食」と「衣」の生活の基本的な技術という点で、男女差が顕著である（表9）。すなわち、自立して生きるという意味で、男子の弱さが目立つといえる。我々家政学や家庭科教育に関わる者にとっては、就学段階で、男女の区別なく、生活文化を習得し、新しい文化の創造に向かって積極的な働きかけができるような青少年の育成をすることが責務となることを、認識すべきであろう。

なお、本研究は平成12年度和洋女子大学学内研究奨励費を得て行ったものである。

文　献

1）小菅充子、布施谷節子：三世代にわたる生活文化の伝承と将来への展望（Ⅰ）―食生活と衣生活について―、和洋女子大学紀要、41、97-106、(2001)

2）中島明子、名取史織、三善勝代：三世代にわたる生活文化の伝承と将来への展望（Ⅱ）―住生活、暮らしの中の植物および生活経営について―、和洋女子大学紀要、41、107-118、(2001)

3）Setsuko Fuseya,Akiko Nakajima, Mitsuko Kosuge, Shiori Natori, Katsuyo Miyoshi: Prospect for Transmission of Cultural Patterns in Multi-generational Japanese Households, The 11th Biennal International Congress of Asian Regional Association for Home Economics Abstracts, 259-260 (2001)

4）厚生省保健医療局地域保健・健康増進栄養課生活習慣病対策室監修：国民栄養の現状、93、(1999) 第一出版

5）小菅充子：即席麺および即席味噌汁の食塩、和洋女子大学紀要、第29集(家政系編)、89-94 (1999)

6）坂口志津子・田上和子他：首都圏における高校生の冬季通学服に関する調査、家庭科教育、75巻7号、69-75 (2001)

7）有馬澄子・布施谷節子：フォーマルウェアの着装評価に関する一考察―アリスミラーによる検証―、東横学園女子短期大学紀要、31、1-12 (1996)

8）松山容子・布施谷節子：七五三の祝い着にみた衣生活行動、大妻女子大学紀要　家政系、31、31-39 (1995)

9）西山夘三：日本の住まい　第2巻、勁草書房、113 (1970)

10）湯浅浩史：植物と行事、242 (1998) 朝日新聞社

11）前川文夫：日本人と植物、193 (1997) 岩波書店

12）細見末雄：古典の植物を探る、289 (1983) 八坂書房

13）金井典美：古典の中の植物、239 (1983) 北隆館

14）森岡清美・望月嵩：新しい家族社会学（三訂版）、3 (1996) 培風館

15）㈶労働問題リサーチセンター委託調査：平成2年度　転勤と勤労者生活に関する調査報告書、99 (1990) 社会調査研究所

16）総理府広報室編：月刊世論調査、5 (1998)

布施谷　節　子（家政学部生活環境学科助教授）
小　菅　充　子（家政学部生活環境学科教授）
中　島　明　子（家政学部生活環境学科教授）
名　取　史　織（家政学部生活環境学科教授）
三　善　勝　代（家政学部生活環境学科助教授）